改宗後のT. S. エリオットの詩と彼の子供時代

古　賀　元　章

はじめに

T. S. Eliot（1888－1965）は、キリスト教ユニテリアン派[1]を信奉する両親―父親 Henry Ware Eliot, Sr.（1843－1919）、母親 Charlotte Champe Eliot（1843－1929）―の厳格な家庭教育のもとで育てられている。そこでエリオットは、祖父 William Greenleaf Eliot（1811－1887）が建てたユニテリアン派のメシア教会（Church of the Messiah）で受洗して成長するが、この宗教を行動規範として強要する両親の家庭環境が重圧となる（Powel 4）。そうした息の詰まる人生を打開するため、彼は1915年にイギリス人の女性 Vivienne-Haigh Wood（1888－1947）と、両親に知らせずに電撃結婚する。しかし、神経症の彼女と苦楽を共にする人生は一向に改善されない。そのことは、彼の詩の終末的な詩風に反映される。

1927年、エリオットは英国国教会[2]へ改宗する。この改宗をきっかけにして、彼の詩は人間の精神的再生を前面に出したものとなる。そのような詩的表現と深くかかわっているのが、彼の楽しかった子供時代（Ackroyd 13）である。

改宗後の詩に目を向けると、エリオットは上述した3人を意識して、新たな人生の再出発を暗に反映させた詩を発表する。そこには、母親を中心とした静寂な世界で生きていこうとする彼の姿が認められるように思われる。その世界の形成に欠かせない要素が彼の思い出深い子供時代であると言える。そこで本稿では、改宗後の彼の詩がこの子供時代とどのようにかかわって展開されているのかについて考察したい。

1

1927年に英国国教会へ改宗する前後のエリオットの詩的表現の検討から論を進めることにする。改宗前に書かれた "The Hollow Men" (1925) は、世界が終わるという表現で締めくくって、現世の終末観を思わせる印象を与えている。エリオットがこうした終末観を描く背景を検討するため、当時の彼の人生に注意を払ってみよう。1914年、ハーバード大学大学院の博士課程に在籍していた彼は、母校からシェルドン在外研究奨学金 (Sheldon Traveling Fellowship) を獲得し、イギリスのオックスフォード大学のマートン・カレッジ (Merton College) で哲学の研究をする。しかし彼は、この国での生活で些細なことに悩んでいるし ("To Conrad Aiken," 30 Sept. 1914, *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1*: 63-64)、第一次世界大戦の重圧のためイギリスが好きになれないし、ハーバードへ戻ることもためらっている ("To Conrad Aiken," 25 Feb. 1915, *Letters, Vol. 1*: 95-96)。母親は息子がアメリカで大学の職に就くことを希望する ("To Bertrand Russell," 23 May 1916, *Letters, Vol.1*: 153)。

このように、人生に活路を見出せないでいたエリオットは、大学時代からの友人、詩人、批評家のエイケン (1889－1973) の尽力により、1914年9月22日にイギリスで文学改革運動を積極的に推進していたアメリカ人の詩人、批評家であるEzra Pound (1885－1972) 宅を訪れる。エリオットは、彼に対して最初は特別な感情を抱いていなかったが ("To Conrad Aiken," 30 Sept. 1914, *Letters, Vol. 1*: 63)、次第に文学に対する彼の情熱に心を奪われる ("Ezra Pound" 327)。また、不安定な精神状態の彼を支えてくれると考えられたのが、1915年6月26日に電撃結婚することになるイギリス人のヴィヴィアンである。電撃結婚に対する彼の心境は、父親に宛てた同年7月23日付の手紙 (*Letters, Vol. 1*: 119) からうかがわれる。パウンドやヴィヴィアンとの出会いがエリオットに、イギリスに定住して文筆活動をさせることになる。しかし彼は、1917年からのロイド銀行 (Lloyd Bank) の勤務と1922年からの *Criterion* の編集長の両立に苦しんでいるし、神経症の妻の看病やその治療代の工面に苦しんだりしている。その結果として彼は、妻と

離別することを考え（"To Bertrand Russell," 7 May 1925, *Letters, Vol. 2*: 652)、後に彼女との結婚が失敗であったと告白する（"To Paul Elmer More," 18 May 1933, Paul Elmer More Papers[3])。

イギリスでのエリオットは人生と詩作の両面ですっかり行き詰まっていた。人生の面については、"〈I am worn out. I cannot go on〉." ("To John Quinn," 12 March 1923, *Letters, Vol. 2*: 72) と、彼が書いていることから把握できる。詩作の面については、"The Hollow Men" が最後の詩であると、彼が述べていること ("To Marianne Moore," 31 Jan. 1934; Lehmann 5) から把握できる。

2

1927年、エリオットは現実社会の発展を重視するユニテリアン派から中庸を標榜する英国国教会に改宗する。この改宗は、母親に反発（本稿の冒頭を参照）と罪意識（"His Mother," 24 Oct. 1917, *Letters, Vol.1*: 227）を抱いていた彼の場合、エリオット家の中心的な存在であった彼女と和解を目指すための選択であったと思われる。改宗という人生の転機が彼に詩作を始動させる。晩年の彼は、そのきっかけについて次のように述懐する。

> ... ; and it was only because my publishers had started the series of 'Ariel' poems and I let myself promise to contribute, that I began again. And writing 'Ariel' pieces released the stream, and led directly to 'Ash Wednesday.' (Lehmann 5)

Faber and Gwyer 社（後に Faber and Faber と社名を変更）が彼に、「エアリアル」詩集の企画のための詩を寄稿しいてほしいと依頼する。その依頼を受けて、彼が執筆したのは、"Journey of the Magi"、"A Song for Simeon"、"Animula" である。さらに、これらの詩の執筆が *Ash-Wednesday* の誕生へとつながり、さらに "Marina" がこの詩集の1編として書かれる。

1927年9月作の "Journey of the Magi" は、「マタイによる福音書」第

2章1－12節を題材にして、3博士のうちの1人が幼子イエスの誕生を祝うためのつらい長旅を経験する。この経験は、われわれ人間が精神的再生を目指すための苦難の旅を示唆する。それは同時に、エリオット自身の精神的再生への渇望と不安の入り交じった複雑な心境を暗に表しているであろう。

1年後、“A Song for Simeon” が発表される。この詩は、「ルカによる福音書」第2章25－35節を題材にして、エルサレムの老齢のシメオンが死を待つ心構えに触れながら、人間の精神的再生を希求する。

エリオットは改宗後に詩を執筆するにつれて、自分の人生の再出発を人間一般の精神的再生へと高めていることが認められる。

3

ところが、1929年9月に母親が死去する。それは、ヴィヴィアンの日記によれば、厳しくて苦悩の時であった（Ackroyd 178）。この出来事を契機にして、広く人間の精神問題に言及するエリオットの詩に子供時代の追憶が強く反映されるようになる。母親の逝去後に脱稿された 1929年10月作の “Animula” には次のような場面がある。

> The heavy burden of the growing soul
> Perplexes and offends more, day by day;
> Week by week, offends and perplexes more
> With the imperatives of ‘is and seems’
> And may and may not, desire and control.
> . . . . . .
> Pray for us now and at the hour of our birth. (16-20, 37)[4]

当時のエリオットは *Dante*（1929年に出版）を執筆中であった。このダンテ論では、*Purgatorio* 16の原文と彼自身の英訳が引用され、子供の無垢な成長の姿が紹介される（45）。“Animula” という詩の表題は、その引用に見られる “*l'anima semplicetta*” [“*the simple soul*”]（*Dante* 45）に由来する。このような子供の成長に比べて、上の詩行の1－5行目は生まれた

後の子供の苦悩を伝えている。後者の姿は、どこか暗いイメージが感じられる。少年エリオットは厳しい家庭環境の重圧を経験している。母親の逝去の悲しみと、この家庭環境への反発に伴って彼女を苦しめた罪悪感とが、この暗いイメージに含蓄されているであろう。上の詩行の最後行は、ローマ・カトリック教会での祈祷文の“our death”が“our birth”に変更されているので、われわれ人間が新たに生まれてくる子供の幸せを聖母マリアに祈る表現であると同時に、エリオット自身が新たな旅立ちをすることを母親に祈る表現にもなっているのである。したがって、上の詩行での“us”と“our”は共に、新たに生まれてくる子供と、新たなに生まれ変わろうとする彼を暗示しているであろう。 彼にとってその原動力は子供時代である。

子供時代についてのエリオットの私的感情を含んだ表現は、“Animula”と同じく、母親の逝去後に書き上げられた *Ash-Wednesday* 第6部にも盛り込まれているように思われる。第6部の次のような表現を見てみたい。

> Blessèd sister, holy mother, spirit of the fountain, spirit of the garden,
> Suffer us not to mock ourselves with falsehood
> Teach us to care and not care
> Teach us to sit still
> Even among these rocks,
> Our peace in His will
> And even among these rocks
> Sister, mother
> And spirit of the river, spirit of the sea, (209-17)

聖母マリアへの崇拝に基づいて、懺悔の祈りが様々な対象（祝福された修道女、聖なる母、泉の精、庭の精）に呼びかけるエリオット独自の表現が示されている。それは、ユニテリアン派から英国国教へ改宗した後の彼の詩作活動の発展として解することができよう。

その一方で、様々な対象はすべて子供時代のエリオット自身と深くかかわりがある。四つの語 （“Blessèd sister”、“holy mother”、“Sister”、“mother”）は聖女としての母親を示唆している。“spirit of the fountain”はマサチューセッツ州の漁港グロスター（Gloucester）のエリオット家の別

荘（1896年に父親が建てる）から見られた泉を連想させるし、“spirit of the garden” はミズーリ州のセントルイスにあったエリオットの生家を連想させる。“these rocks” は別荘の近くにあった大きな岩の上で母親と一緒にいたことを思い出させる。[5] “spirit of the river” は生家の近くを流れていたミシシッピー河を示唆するし、“spirit of the sea” は別荘から見渡されたニューイングランド海を示唆する。こうして上の詩行は、エリオットが子供時代に一緒に過ごした母親と深く関係のある語で構成されているのである。

初版の *Ash-Wednesday* には “To My Wife” という献辞があったので（*Ash-Wednesday* 9）、上の詩行の “ourselves”、“us”、“Our” はエリオットとヴィヴィアンを暗に指している。

“Our peace in His will” は、エリオットが *Dante* の中で、*Paradiso* 3 に登場する13世紀イタリアの修道女 Piccarda Donati の言葉（“la sua voluntate è nostra pace [..]”）を英訳した “His will is our peace.” (52) を反映させたものである。彼はこの言葉について、誰にでも平等であるはずの神の祝福には段階が存在すると解説している (52)。こうした彼の解説に基づけば、“Our peace in His will / And even among these rocks” は、妻と私がこれから別々の苦難の道を歩もうとも、2人に神の祝福があるようにというエリオットの祈りを暗に示している。“Teach us to care and not care / Teach us to sit still” は、2人が間違った道に進まないように、神の導きを静かに待とうとする彼の気持ちを暗に表している。

Ash-Wednesday は次のような詩行で終わっている。

> Suffer me not to be separated
>
> And let my cry come unto Thee. (218-19)

詩的表現が以前の “us”、“ourselves”、“Our” から “me”、“my” に変化している。この変化から注目されることの一つは、個々の人間が聖母マリアのとりなしにより、浄罪を神へ強く祈る表現である。もう一つは、エリオット自身が楽しかった子供時代を心の拠り所にして、聖女としての母親のとり

なしにより、自らの浄罪を神に必死になって届けようとしている表現である。その姿勢には自分の現在の心境を妻に理解してもらいたいとする祈りや、自分の人生で苦しませた父親（Ackroyd 19）への懺悔の祈りも認識できよう。

エリオットは思い出深い子供時代を素材にして、母親を中心とした静寂な世界を創り出し、彼女に自分と深くかかわる人物（両親、妻）へ懺悔する祈りを行っているのである。

母親の死後の1930年6月2日に、エリオットはアメリカの批評家で古典学者のPaul Elmer More（1864－1937）に手紙を出している。その手紙の中で彼は、*Ash-Wednesday* が情緒を訓練するために重要な作品である *Vita nuova* の哲学を現代生活に適用した最初の試みであると書いている。彼が *Dante* の中で目に留めるのは、高次の肉体的愛、生きているベアトリーチェ(Beatrice)、聖母マリア信仰である（66)。このようなダンテの愛の哲学を模範として、彼は自らの詩で、母親への崇高な愛、心の中でいつも生きている母親、聖母としての母親を描いていると言えよう。彼が思考する静寂な世界は、これらの母親像を含んでいるのである。

初版の *Ash-Wednesday* は1930年4月に刊行される。5か月後に“Marina”が発表される。そこには次のような描写が見られる。

> This form, this face, this life
> Living to live in a world of time beyond me; let me
> Resign my life for this life,... (29-31)

この詩の表題は、イギリスの劇作家 William Shakespeare（1564－1616）の *Pericles, Prince of Tyre* で、タイヤの領主ペリクリーズの娘マリーナ(Marina）という名前である。この劇の第5幕第1場で、老齢のペリクリーズは船旅の先で死んだと知らされていた娘と再会する。エリオットにとって“Marina”の主題は領主の再会であった（“To E. MaKnight Kauffer,” 24 July 1930; qtd. in Schulman 211)。エリオットはまた、1932年作の“John Ford”の中で、シェイクスピアの劇のペリクリーズが娘のマリーナと再会することに注目する（171)。

このように、エリオットは父娘の再会に心を引かれている。この印象が上の詩行の内容に反映されている。語り手はペリクリーズである。生きていた娘の姿が "This form, this face, this life" と描かれているし、彼女の世界が "a world of time beyond me" と描かれている。行方不明となっていた娘を発見したとき、彼は現世への執着を諦めほどの無上の歓びに酔いしれている。"Marina" を発表したとき、エリオットはシェイクスピアの劇にうかがわれるペリクリーズの精神的再生を伝えようとしていると言えよう。

"Marina" は、死んでいたと思われたマリーナを生きているマリーナへと高めて、これから娘と一緒になる歓喜を噛み締める父親のペリクリーズの気持ちを示唆している。*Ash-Wednesday* では、エリオットは静寂な世界を形成し、その中心に母親がいた。"Marina" では、彼はこのようなペリクリーズの気持ちを通して、心の中で生きる母親との深い絆を再発見している。それは、エリオットが父親や妻が構成員である静寂な世界を築くことになるのである。その構築を後押ししているのが、*Ash-Wednesday* 第 6 部の詩行で見られたように、彼の子供時代である。

エリオットは最初の評論集 *The Sacred Wood* の再版の序文で、"the relation of poetry to the spiritual and social life of its time and of other times" (preface to the 1928 edition viii) と書いている。この叙述が示唆するように、彼は詩のあり方を現在や過去における精神的・社会的な生活との関係で考えるようになる。このような彼の考えが、後の *Coriolan*[6] という表名の詩に収められている未完の詩 "Difficulties of a Statesman" (1931-32)[7] に登場する語り手のコリオレイナスの政治家としての苦悩の描写に反映される。彼はこの苦悩を取り除くため、"What shall I cry? / Mother mother ... O mother / What shall I cry?" (27-28, 50-51) と叫んで、母親の助けを求めている。語り手の発言からうかがえるのは、エリオットが心の中で実母への依存を "Marina" 以後も持続していることである。

4

エリオットは、1932－33年にハーバード大学で講義を行い、1933年にヴァージニア大学で講義を行う。兄の Henry Ware Eliot, Jr. (1879－1947) はアメリカ滞在が弟にとって子供時代以来の幸せであったと話している ("To Marianne Moore," 9 June 1936, Marianne Moore Papers)。エリオットはイギリスへ帰国前に、兄の家に立ち寄っているので、この話はそのときの彼の言葉に基づいているのであろう。帰国後、エリオットは勤務するフェイバー・アンド・フェイバー会社の重役である Frank Morley (1899－1980) の住むサリー州の農場で一時的に身を寄せている。モーリーは当時の彼がセントルイスでの生活を懐かしがっていたことを回想している (108)。その生活は、もちろん、彼の子供時代を指している。

1935年、エリオットは "Burnt Norton" を公表している。表題のバーント・ノートンは、イギリス南西部のグロスターシャー (Gloucestershire) にある古い荘園である。彼は1934年から数回、この荘園を訪れている。彼はそのときの体験に基づいて、次のように書いている。

> Other echoes
> Inhabit the garden. Shall we follow?
> Quick, said the bird, find them, find them,
> Round the corner. Through the first gate,
> Into our first world, shall we follow
> The deception of the thrush? Into our first world.
> There they were, dignified, invisible, (17-23)

兄の手紙やモーリーの回想を重視すると、"we" と "our" は現在のエリオットと子供時代の彼を暗に指しているであろうし、"first world" はその時期の世界を暗に指しているであろう。また、"them" と "they" は、"dignified, invisible" に注意を払うと、他界している彼の両親を示唆しているであろう。

両親を慕って散策するエリオットは、干上がった池にやって来る。日の光がこの場所を照り付けたとき、彼は言葉で言い表せないほどの喜びを体験す

る。その体験が次のような詩行で書き留められる。

> What might have been and what has been
> Point to one end, which is always present. (45-46)

"What might have been" は実際の出来事の反対のことを表しているし、"what has been" は実際の出来事を表している。ところが、相反するこれらの出来事が志向するのはいつも現存する地点である。

その地点が "the still point of the turning world" (62) と表現されている。"the turning world" は人々が毎日の生活に明け暮れる社会を示唆している。この社会を見つめると、われわれの心を引き付けて離さない「静止点」がある。この「静止点」が先の "one end" であり、そこでは、"The compulsion,… inner freedom from the practical desire, / The release from action and suffering, release from the inner / And the outer compulsion,…" (70-72) であると解説されている。われわれは、相反する二つの出来事に固執しないようにすると、一般的な人間の考え（欲望、行為、苦痛、内外の強制）との葛藤に耐えられるようになる。そこで、"What might have been" から連想されるのは両親に従順であった人生であろうし、"what has been" から連想されるのは彼らの意に反して選んだ人生であろう。これらの人生は、エリオットとヴィヴィアンとの関係についても言えるように思われる。その結果、彼がこの詩を執筆することは、両親への罪意識を取り除く行為につながるのである。その方法は彼にとって、これからの人生に固執しないことである。その方法はまた、別居中の妻にも向けられている。彼は母親宛の1917年12月30日付の手紙の中で、彼女が様々な思い（先のこと、後のこと、過去、現在、未来）を包括した奇妙な時を意識させる人であると書き綴っている (*Letters, Vol. 1*: 243)。そこで、「静止点」は母親の姿と重なっているし、この世界は父親や妻が仲良く存在する秩序を形成するのである。

"Burnt Norton" の公表から5年後、"East Coker" が書き上げられる。この詩の表題は、エリオットの祖先たちが住んでいたイギリスのサマセット

シャー（Somersetshire）にある村の名前から採用されている。祖先のAndrew Eliot（1627－1704）が1667年にこの村からアメリカに移住した。この移住が同国でエリオットの家系の始まりであった。この村を訪れたとき、エリオットは、祖先たちを含む村人が夏の夜にかがり火の回りで笛や太鼓に合わせてリズミカルに踊る動きを追憶する。この追憶が“I am here / Or there, or elsewhere.”（49-50）と表現されている。この表現から、彼は村人の調和ある日常生活を思い浮かべ、一種の「静止点」（心の安らぎ）を感じ取ったであろう。彼は、現在と過去の密接なかかわりを、個人的な視点から歴史的な視点にまで広げて学んだと言える。

1年後、“The Dry Salvages”が書かれる。そこでは、次のような表現がある。

> The river is within us, the sea is all about us;
> The sea is the land's edge also, the granite
> Into which it reaches, the beaches where it tosses
> Its hints of earlier and other creation: (15-18)

“The river”は、エリオットの生家の近くで見られたミシシッピー河である。そうすると、“within us”の“us”は、“Burnt Norton”の場合と同じく、現在の彼と子供時代の彼を暗示するであろう。エリオットは、アメリカの小説家Mark Twain（1835－1910）の*The Adventures of Huckleberry Finn*に寄せた序文の中で、この河が始めと終わりを超越していること（xvi）、言い換えれば、無時間性の存在であることを述べている。母親宛の1917年12月30日付の手紙の中で、彼女が現世の時間を越えた人物であった。そこで、彼の序文の叙述から読み取れるのは、この河の描写と彼が心に抱く母親の姿とが深く結び付いていることである。

“the sea is all about us”は、エリオット家の別荘から眺められたニューイングランド地方の海を指す（Boyd 21）。ここでの“us”も、現在の彼と子供時代の彼を暗示するであろう。この別荘にあるグロスターに触れた1917年の母親宛のエリオットの手紙ではこの漁港の思い出の中心が母親である（*Letters, Vol. 1*: 201, 204, 206, 208）。そこで、この海は彼に、ミシシッピー

河と同じく、母親を包む非時間的な永遠性に接する機会を与えたであろう。こうした非時間的な永遠性は、彼が先の“East Coker”から学んだ歴史的な視点を未来にも適応して、三つの次元（現在、過去、未来）の密接な関係を考察した結果の表れである。

“The Dry Salvages”は、過去の体験を秘めた意義を暗示した詩行を次のように表現している。

> We had the experience but missed the meaning,
> And approach to the meaning restores the experience
> In a different form, beyond any meaning
> We can assign to happiness. (193-96)

われわれがさかのぼる過去の体験は、一般的な幸せに帰する意義とは違ったものをもたらすという。その内容にも、これまでの論考から察して、エリオットの個人的な感情が含まれているように思われる。彼は、子供時代の自分と一体となって、当時の体験の本当の意義を今になって改めて認識しているのである。その体験の意義は、「静止点」となっていつも見守ってくれる母親の尊い存在である。この認識こそ、人生上の苦しみを克服するために彼が下した結論であると判断できよう。

おわりに

ユニテリアン派を信奉する両親との関係、精神異常の妻との生活、過重な仕事などが原因で、1925年頃のエリオットは人生に行き詰まる。この絶望感が、その時期に書かれた彼の詩作に表されている。彼が人生の行き詰まりから立ち直る契機となったのが、1927年に中庸を標榜とする英国国教会へ改宗したことである。この出来事は、彼が上述した原因に取り組む契機になり、人間の精神的再生を盛り込んだ改宗後の詩を発表することへとつながる契機にもなるのである。

英国国教会の特徴である中庸は、人生と詩作の両方で救いになっている。人生上では、これまで背信行為を行って苦しめた両親に対しても、また、こ

れからも別々人生を歩むことで苦しめることになる妻に対して、罪を懺悔するのに有益であったと思われる。その際、英国国教会の一員としての彼は、この宗教に見られる聖母マリア信仰に注目し、人間の精神的再生を前面に出した詩的表現に取り入れることを忘れていない。彼は同時に、聖女として母親を高め、その信仰に併せて母親を中心とし、そこには父親と妻が構成員となる静寂な世界を築くことを試みている。その試みを積極的に後押しするのが彼の楽しかった子供時代である。改宗後のエリオットは、思い出深い子供時代の出来事を盛り込みながら、詩を展開させていったのである。

注

1．この派については、次のような解説を参照。
「三位一体論を否定、単一人格の神を主張し、イエス・キリストの神性を認めず、その贖罪を無意味とし、聖霊を神の現存とする教派。人類愛を唱えた社会的な改革にも関心が強い。」(『岩波キリスト教辞典』1144)

2．英国国教会については、次のような解説を参照。
「英国教会、英国聖公とも言う。……英国教会がローマ教皇から独立し、自立した国民教会となるのは16世紀のことである。国王ヘンリー8世の結婚無効宣言がきっかけとなって英国宗教改革は開始されたが、その背景にはウィクリフやロザード派らの改革運動や大陸のカルヴィニズムを中心とする宗教改革の影響がある。続くエドワード6世の時代に、カンタベリー大主教クランマーによる礼拝、制度の大胆な改革が次々に実行され、中でも祈祷書（*The Book of Common Prayer*）の制定は英国教会に独自性を与えた。1558年にエリザベス1世が即位し、英国の宗教改革は完成期を迎える。エリザベスの宗教解決により、英国教会は極端なローマ主義もプロテスタント主義も採らないヴィア・メディア（中庸）の方向性を確立していく。」(同 136)

3．本稿で引用するモア宛のエリオットの手紙はすべてプリンストン大学図書館のモア資料による。

4．エリオットの詩からの引用は *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。ただし、*Ash-Wednesday* からの引用は1930年に出版されたものによる。

5．エリオットの *Letters, Vol.1* の248－49頁には、別荘の近くにある大きな岩の上で少年エリオットが母親と一緒にいる写真が挿入されている。また、同じ書簡集の536－37頁には、別荘とその近くにある大きな岩の写真も挿入されている。

6．この詩の初出は、*Collected Poems*, 1909-1935（1936）である。

7．この詩の初出は、*Commerce* 29（Winter［1931/］1932）である。そこには、Georges Limbour による仏語訳が併記されている。

引用文献

Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life.* New York: Simon and Schuster, 1984.

Boyd, John D., S. J. "*The Dry Salvages*: Topography as Symbol." *Renascence* 20.3 (Spring 1968): 119-33, 161.

Dante Alighieri. *Vita nuova.* 1992. Trans. Mark Musa. Oxford: Oxford UP, 1999.

Eliot, Henry Ware, Jr. "To Marianne Moore," 9 June 1936, Marianne Moore Papers, The Rosenbach Museum and Library, Philadelphia.

Eliot, T. S. Preface to the 1928 Edition. *Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism.* 1920. London: Methuen, 1928. vii-x.

---. "To Paul Elmer More." Shrove Tuesday 1928. Paul Elmer More Papers. Princeton U Library, Princeton.

---. *Dante.* London: Faber and Faber, 1929.

---. *Ash-Wednesday.* London: Faber and Faber, 1930.

---. "Difficulties of a Statesman." *Commerce* 29 (Winter [1931/] 1932): 79-87.

---. "John Ford." 1932. *Selected Essays.* 193-204.

---. "To Paul Elmer More." 18 May 1933. Paul Elmer More Papers.

---. "To Marianne Moore." 31 Jan. 1934. Marianne Moore Papers.

---. *Coriolan. Collected Poems, 1909-1935.* 1936. London: Faber and Faber, 1951. 133-39.

---. "Ezra Pound." *Poetry* 68.6 (Sept. 1946): 326-38.

---. Introduction. *The Adventures of Huckleberry Finn.* By Samuel L. Clements (Mark Twain). London: Cresset P, 1950. xii-xvi.

---. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot.* London: Faber and Faber, 1969.

---. *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922.* 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 4 vols. 2009-2013.

---. *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 2: 1923-1925.* Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009.

Lehman, John. "T. S. Eliot Talks About Himself and the Drive to Create." *New York Times Book Review* 58.48 (29 Nov. 1953): 5, 44.

Morely, Frank. "A Few Recollections of Eliot." 1966. *T. S. Eliot: The Man and His Work.* Ed. Allen Tate. London: Chatto and Winds, 1967. 90-113.

Powel, Harford Willing Hare, Jr. "Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910." Unpublished dissertation Brown U, 1954.

Schulman, Grace. "Notes on the Theme of 'Marina' by *T. S. Eliot.*" *T. S. Eliot: Essays from 'The Southern Review.'* Ed. James Olney. Oxford: Clarendon P, 1988. 205-11.

Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot.* 1968. London: Faber and Faber, 1994.

大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編. 『岩波キリスト教辞典』. 東京 : 岩波書店, 2002.

日本聖書協会改訳. 『聖書』. 新約聖書. 1954. 旧約聖書. 1955. 東京 : 日本聖書協会, 1969.